

Euro-Asia Tourism Studies Association (EATSA) 発足会議参加報告

公益財団法人日本交通公社 観光政策研究部 研究員 外山 昌樹

2015年6月7～11日にかけて、台湾におこつてEuro-Asia Tourism Studies Association (EATSA)の発足会議 (Inaugural Conference) が開催され、当財団からは筆者が参加した。

本稿では、会議への参加報告を行うとともに、関連する新たなツーリズム研究の動向についても紹介したい。

Euro-Asia Tourism Studies Association (EATSA) について

EATSAは、ヨーロッパとアジア地域におけるツーリズム・ホスピタリティ・レクリエーション領域を専門とする研究者らが中心になって設立された学会である。会議名が発足会議 (Inaugural Conference) と名付けられているように、2015年から本格的な活動がスタートしている。

学会の設立目的は、「アジアとヨーロッパにおけるツーリズム・ホスピタリティ・レクリエーションに関する研究・教育の促進」であり、特に国際比較や、研究成果および実践事例の知見を共有することに重点が置かれ

ている。

ツーリズム・レジャー・ホスピタリティ経営分野の国・地域別論文発表数ランキングの1位がアメリカ、4位がカナダとなっているように、この分野に関する学術研究は北米地域がリードしている(注1)。そうした中で、北米地域ではなく、ヨーロッパやアジア地域が中心となって活動する本学会はユニークな存在であると考えられる。

会議の様子

本学会の記念すべき最初の年次会議は、台湾において開催された。会議の前半3日間は台北、後半2日間は花蓮と開催地域が分かれるプログラムとなっており、筆者が参加したのは前半部分であった。

前半のプログラムは、台北近郊に所在する輔仁大学 (Fu Jen Catholic University) が会場となっていた。同大学はカトリック系の私立大学であり、レストラン・ホテル・組織経営学科 (Department of Restaurant, Hotel and Institutional Management) が設置されている。

大学名の略称が駅名に冠されている MRT「輔大駅」の目の前にはキャンパスが広がっており、その中に所在する図書館が併設された建物において研究発表や講演が行われた(写真1)。キャンパス内は日本の大学によく似た風景が続き、日本式「幕の内弁当」(写真2)が昼食として提供されるなど、国内学会に近い雰囲気味わえたのは新鮮であった。

写真1 会議の会場



写真2 昼食の日本式「幕の内弁当」
(具や味付けはやや台湾風)



会議プログラム

具体的なプログラム内容については、一般的な国際会議と同様、基調講演、口頭研究発表、レセプションなどが盛り込まれていた。なお、今回の会議では、ポスター発表は実施されなかった。筆者が参加した前半部分の口頭発表数は全部で31本(セッションの数は9)であった。1つのセッションの時間は90分であり、2〜4本の発表が行われた。

発表内容の傾向としては、マーケティング、サービス産業、ブランドینگ、旅行者行動というキーワードに代表されるような、経営学的な視点に基づく研究が多かったように感じた。日本からの発表数は、前半部分では全部で8本であった(表1)。筆者も共同著者として、京都における旅行者のサービス品質と満足、ロイヤルティに関する研究発表に関わった。開催地域が前半と後半で分かっていたせいか、会議の規模は、筆者がこれまで参加した他学会の年次会議に比べると大きいわけではなかったが、新しい研究コミュニティが生まれていく勢いが随所に感じられた。

3日間であった。

知のオープン化が進む

今回の会議に参加して気づいた、学術誌にまつわる新たな動きについて報告したい。EATSAでは今のところ独自の学術誌を発行していないものの、本学会の設立メンバーであり、今回の会議にも参加していたポルトガルのFrancisco Dias氏(Polytechnic Institute of Leiria)が「European Journal of Tourism, Hospitality and Recreation」(注2)、スペインのAlfonso Vargas-Sánchez氏が「Enlightening Tourism. A Pathmaking Journal」(注3)と2誌を査読つき学術誌の編集を行っている。これら2誌の特徴は、ウェブサイトで全ての論文を公開しているオープンアクセスジャーナルと言われる形態をとっている点にある(ウェブサイトのURLは脚注参照)。海外における一般的な学術誌は、論文内容を閲覧するのが基本的に有料である。近年は購読料も上昇傾向にあり、大学図書館の中には購読できる学術誌の数を減らすところも出てくる。他方、誰もが無料で内容を閲覧できるオープンアクセスの原則を取り入れた学術誌は、自然科学系を中心に増加している。多くの知見が広く共有されることは、新たな理論構築の進展やイノベーションの創出につながると思われる。ツーリズム研究の領域においても、今後はオープンアクセスジャーナルが存在感を増していくのかもしれない。(とやま まさき)

表1 日本からの発表リスト

著者(敬称略)	タイトル
Chih-Sheng Kang (同志社大学)	DEVELOPING OF SERVICE INNOVATION IN TAIWAN CONVENTION AND EXHIBITION INDUSTRY
廣岡 裕一(和歌山大学)	WHO DO TRAVEL AGENTS TRULY REPRESENT IN JAPAN?
大島 知典(立命館大学)	INTEGRATED TOURISM DEVELOPMENT ORGANIZATION AT KUMANO HONGU IN JAPAN
宮城 博文(大阪商業大学) 外山 昌樹(公益財団法人日本交通公社)	AN EMPIRICAL ASSESSMENT THROUGH PROCESS QUALITY AND IMAGE IN TOURIST DESTINATION: AN APPLICATION TO KYOTO
Sang Jun Kim (近畿大学)	DESTINATION MARKETING FOR ACTUALIZATION OF A TOURISM NATION
丸山 政行(プール学院大学)	STUDY ON DEVIATION OF PREFERENCES OF YOUNG PEOPLE AND COMMODITY CHARACTERISTICS OF PACKAGE TOURS IN JAPAN
近藤 祐二(一般財団法人 京都大学名誉教授森下正明研究記念財団)	THE STUDY OF TURNAROUND OF THE AIRLINE BUSINESS
角谷 尚久(一般財団法人 京都大学名誉教授森下正明研究記念財団)	STUDY OF LCC ROUTE ENTRY EFFECT IN SIGHTSEEING IN OKINAWA

(注1) 原忠之(2014)「世界の潮流の変化・方向性に呼応しない日本観光学術界に迫り来る危機と変革への戦略試案」 観光文化221号所収

(注2) <http://www.ejthr.com>

(注3) <http://www.uhu.es/publicaciones/ojs/index.php/et/index>